

ALLSORTS

Vol.

24

MICHIKO HATANO

TEXT by 三村 溪

PHOTO by 大田 メグミ

PROFILE

子どもの頃より“色”に興味をもつ。絵
子どもの頃より“色”に興味をもつ。絵
画教室を経て、さる画家のアトリエに
弟子入りし、現在の基礎をきずいた。
その後、染色の現場を学ぶため現場労働に従事するなど、過去の経歴にはユニークな活動も多い。
現在、小田原株式会社京都市下京区四
条堂町角で“C部G部”ブランドを担当。
同世代より遥かに先をゆきたい、新規
ブランドの若きチーフである。

幡野 美智子
和装小物ディレクター

子どもの頃から絵画教室に通っていた。だが特定のテーマを与えられると、ほとんどなにも描けなかったという。自由を描いて、といわれてはじめてスラ
スラと描きだす子どもだった。それな
ら自由な発想を伸ばそう、ということ
で或る画家(図案作家)を紹介された。そ
れで高校時代から二十歳の頃まで、そ

の画家のもとで修行した。学校が終わればその作家宅へ直行、午前すぎまでそこにいることも珍しくはなかったという。ただ、鉛筆を手にすることはまったくなかった。いつつけられるのは庭の草ムシリや子供の世話などの雑用ばかりだった。

も描く。テーマはさまざまだが、時に生きたままの鶏を吊し、その死にゆくさまを描写することもあった。夏場のことで、腐敗具合いも凄惨だったが、その後始末は彼女の役目だった。普通ならば近寄ることすら出来ないが、案外平気だったという。それより心の中で考えていたことは、

「私なら、こう描く…」
実は、彼女の他に二〇名ぐらいの生徒がそこに出入りしていた。ほとんどの者がすぐ鉛筆を握った。だが、ひとりふたりと欠けてゆき、最後には彼女を入れて二名だけとなった。

その師匠は突然、彼女に図案を描くことを求めた。彼女は何のためらいもなくその場で花の図案を描いたという。そして、それはすぐに「仕事」として採用された。

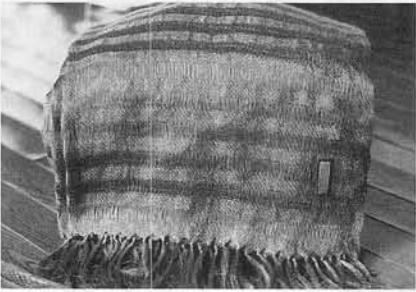
このままアートの世界で生きていくのもいいかな、とも思った。が、だんだん世間を知りたいという欲求が強



デジヤヴ



1

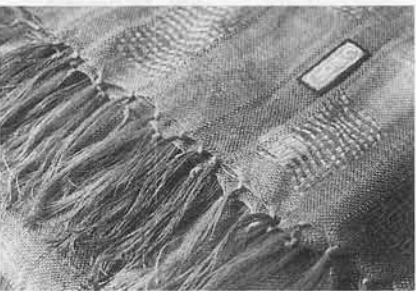


2



3

いずれも、現在、幡野さんが手掛けているスカーフ。たいへん手ざわりのよい麻でつくられている。結んでもシワにならず、身につけた時の“馴染み感”もしい。モノクロなのが残念だが、折り目のタッチや色あいはとてもシックだ。単色であるにもかかわらず、モノラルな色表現に至っていないところにも好感もてる。光の当たり具合、昼夜の微妙な表情の違いも面白い。とことんこだわりぬいてつくった商品だが、どんな服にもよく合う柔軟性を備えている。



4

「別に、売れなくてもいいんです。
見て、触って、いいなあ、と思ってもらえたら、
それだけで満足なんですよ。
だから、いつか東京駅のプラットフォームに、
自分のつくったスカーフを置いてみたいなあ、
と……」

なった。そこで服地会社へ一般事務で入社した。やがてその会社から配色の先生を紹介してもらってチャンスを得る。昼は勤め、夜はその先生の所に通って勉強した。

その後、服地の染工場へも就職した。長靴をはいて作業する、いわゆる板場である。自分で服地の染色を修得したい。それが理由だった。

現在の会社着物の老舗／小田章株式会社で仕事を始めるようになったのは、ふとしたことで社長の知遇を得てから。彼女の経歴を知った社長は、「面白いじゃないか。ウチで何かやって入社を依頼したという。」

そこで、スカーフをやらせて欲しいと希望した。エルメスやシャネルは有名だが、どれもまず洋服が先にくる。単独でこのメーカー、このブランド、と云われるものがない。ならばスカーフはここだといわれる専門ブランドをつくりたい。彼女はそう考えた。

ブランド名はC 郎 G 郎。茶屋四郎二郎にちなみ、社長が新ブランド用に温

めてきた名をアレンジした。設立したのは今年5月。9月にはブランド発表も行った。

実際の商品制作に、今の会社で培われたものを利用したことはない。すべて自分自身の力で調えた。染色は横浜が一番だと聞けば、そこに一週間滞在した。一〇〇件以上のメーカーと交渉、想いを充分汲んでくれるところが現れるまで粘りつづけた。染の現場、水洗の現場、蒸の現場、果ては縫製内職のおばちゃんのところまで自分の足を運び、想いを伝えた。

素材は天然素材と決めるが、産地や銘柄、種類は特定していない。それよりも心に浮かんだ感触や質感と同一であるかどうかが重要だという。織り方も自分で織り見本を制作、これと同じ物を、と要求する。そうして出来上がるものは、糸ひとすじに到るまで彼女の想いが込められている。

そして、

「そこまでこだわりつけ、スカーフを通して試みる表現が、和なこみである。日本人のネイティブな部分へ共鳴する

もの。見て、さわって、
「ああ、日本っていいなあ」
そんなふう感じてもらえるもの・・・
はじめてなのに、いつかどこかで確かめたことのあるような感覚・・・それが彼女の求めるものであり、提案したいことだという。

「山の中にね、一本の樹があるんです。それを朝から夕暮れまでずっとみつめているんです。太陽のうつろいにつれて、あたりの風や空気もかわっていきますね。それにつれて、その樹の色も刻々と変化していく。
子どものころ、父に連れられて山へキャンプに行くと、私はいつもじっと樹をみつめていたんです。そうして、そのかわりゆく色の表情を、ある種、不思議ななつかしさをもって、ずっとあきずに眺めていたんです」

「こだわり」という言葉は誰もが口にします。しかし聞くほどに出逢うことは少ない。二十三歳の女性の口から、今日、久しぶりに本物のこだわりを教えられたような気がした。